

<b>Title</b>	「デジタル・ナルシス、あるいは情報偏愛：デジタル社会の人格・アイデンティティ」報告（主催：八重洲ブックセンター 協賛：聖学院大学出版会『デジタルの際：情報と物質が交わる現在地点』出版記念トークイベント）
<b>Author(s)</b>	河島，茂生
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :47-48
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5268">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5268</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archive

主催：八重洲ブックセンター 協賛：聖学院大学出版会

『デジタルの際——情報と物質が交わる現在地点』出版記念トークイベント  
「デジタル・ナルシス、あるいは情報偏愛：デジタル社会の人格・アイデンティティ」報告



2014年12月26日（金）、東京駅近くの八重洲ブックセンター本店にてトークイベント「デジタル・ナルシス、あるいは情報偏愛：デジタル社会の人格・アイデンティティ」が行われた。このトークイベントは『デジタルの際：情報と物質が交わる現在地点』（聖学院大学出版会、2014）の刊行を記念して開かれたものである。定員は80名であったが、臨時に席を急遽増やして対応するほど多くの人が参加した。

登壇者は、『デジタルの際』の編著者であり本報告の執筆者である河島茂生、第四章を執筆した横山寿世理先生（聖学院大学人文学部日本文化学科准教授）、そしてゲストスピーカーとして招待した西垣 通先生（東京経済大学コミュニケーション学部教授、東京大学名誉教授）の3名である。西垣先生は、いわずと知れた情報学の第一人者であり、1991年に『デジタル・ナルシス』（岩波書店）という本を上梓されている。今回の『デジタルの際』は、序章「デジタル・ナルシス」から始まり、終章である第八章でも「デジタル・ナルシス」に言及して終わるといった形式をとっており、西垣先生の思想の流れのなかにあるといえる。そのため、ゲストスピーカーとして招待した。

まず、河島が『デジタルの際』の全体的なテーマを紹介した。『デジタルの際』は、デジタル情報が増大するなかで、その範囲を描こうする企図のもとに編まれた。したがって、デジタル情報から零れ落ちるものも射程に収めながら編成している。コンピュータが処理するデジタル情報はいわば指数関数的に増えている。もはや人間がコントロールできないほどデジタル情報が溢れている。そうしたなかで、ただ盲目的に暮らすのではなく、デジタル情報の流れを理解しなければならないのではないだろうか。そうでないと、われわれはデジタル情報の渦のなかで溺れてしまうのではないか。デジタル社会でなにが生まれ、なにが失われていくのか。デジタル情報の現在地点を見定めるためには、ハウツー本のようにデジタル機器の使い方を説明するのではなく、最深部にまで潜行する必要がある。『デジタルの際』の問題意識はそこにあった。

「デジタルの際」はいたるところに存在している。単にその境界についての考察を集めただけでは本としてのまとまりを欠いてしまう。そこで次ページの「図「情報／物質」軸と「集合性／個別性」軸の交差」をもとに本の構成を作った。目次は本報告の末尾に示す通りであるが、1象限ずつに1部を割り当て全部で4部構成とし、1部ごとに2章を設けている。

次に、トークイベントでは、横山先生より第四章の概略が解説された。第四章は、前述の図の第二象限にあたり、「アイデンティティの不確定性：固定化から生成変化へ」と章タイトルが付けられている。章タイトルに示されている通り、デジタル社会のアイデンティティがテーマとなっている。その内容は、これまでの研究の問題点が分かりやすく整理された後、H・ベルクソンの自我論に依拠しながらネットアイデンティティの不確定性によって表層的自我がその固定化から逃れる可能性を示唆するものであった。部分的とはいえ、すでにネット上の自己がオフラインの自己に影響を与

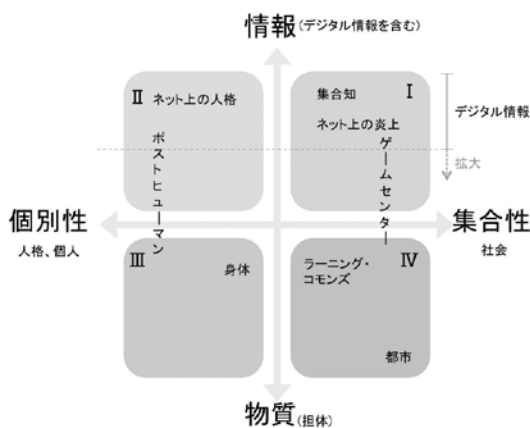


図 「情報／物質」軸と  
「集合性／個性性」軸の交差

えることが増えている。たとえば、Amazon.comなどのショッピングサイトで商品をクリックすると、それに関連する商品が紹介され、自己を見つめなおすきっかけが与えられている。

横山先生のプレゼンテーションの後、西垣先生を交えて鼎談を行った。西垣先生からは、第四章の内容に関して、「ベルクソンのいう「深層の自我」は個人の内部に存在しているものであり、それとネットアイデンティティを同一視してよいのか」という質問がなされた。たしかに、両者は同一ではない。というのも、ネットアイデンティティはあくまで工学的なメカニズムに則っているものであるのに対して、個人の内部に属する「深層の自我」は生命の40億年ほどの来歴が刻まれた中から生じるものであるからである。ただし、両者は似通っている面もある。かつてW.ベンヤミンは写真が視覚的無意識を開くと述べたが、それと同じように、インターネットは工学的無意識をいざなう。意識の変動を生み出すものとして、深層の自我とネットアイデンティティは似た働きを示すといえるだろう。

会場からの質問は、予定時刻がすでに過ぎていたため、2件だけ受け付けた。参加者を交えてデジタル情報との係わり合いかたを考える機会をもてたと考えられる。

なお、『デジタルの際』は全国のどの書店でも手に入れることができる。また、Amazon.co.jp、紀伊國屋ウェブストアや聖学院大学出版会ウェブサイトなどでも購入することができる。聖学院大学総合図書館でも借り出し可能である。また、『デジタルの際』の刊行に際しては、木下 元氏ならびに花岡和加子氏を中心とする聖学院大学出版会の手厚い援助があったことを最後に記しておく。

(文責：河島茂生 [かわしま・しげお] 聖学院大学政治経済学部政治経済学科准教授)

## デジタルの際——情報と物質が交わる現在地点

河島 茂生 編著

四六判並製 2,160円 (税込)



### <内容紹介>

われわれは、デジタル情報に囚われているのではないだろうか。デジタル・ナルシスあるいは情報偏愛と呼べる事態にあるのではないだろうか。本書は、デジタルの幻惑から抜け出すために、「情報／物質」「集合性／個性性」の二軸を交差させ、デジタル情報の自己運動やそれをめぐる個人や身体のあるかを具体的に描出する。デジタル情報に回収されない場も視野に収めながら、デジタルの輪郭線を多角的に描いた思考の集成。

(2014年12月25日 発売)

### <目次>

序章	デジタル・ナルシス	河島 茂生
第Ⅰ部	集合性をまとうデジタル情報の運動	
第一章	ネットにおける集合性変容の予兆と資本主義——ユーザー生成型メディアの来歴と未来	佐々木 裕一
第二章	個人情報をめぐるせめぎあい——「人類史上最悪絶望的事件」の集合性	河島 茂生・椋本 輔
第Ⅱ部	デジタル情報にまみれる個人のありか	
第三章	多重性が消失するとき——人格の一元化	河島 茂生・椋本 輔
第四章	アイデンティティの不確定性——固定化から生成変化へ	横山 寿世理
第Ⅲ部	情報と身体とのかかわり	
第五章	レイヤー化するイメージ——動画の分割性について	畠山 宗明
第六章	「パターン」としての「心身問題」——情報とクオリアの際、その地図	西川 アサキ
第Ⅳ部	デジタル情報に包摂されないコミュニケーション	
第七章	eラーニングとラーニング・コモンズ——遠隔の学習、場を同じくする学習	岡部 晋典
第八章	オンライン時代のゲームセンター——ソーシャルメディアとゲームを媒介としたコミュニケーション	加藤 裕康